

## 中学校社会科における資質・能力を育む授業の構想 —「歴史的な見方・考え方」を深めるための他教科や領域との連携を通して—

矢澤 拓真 高度教職開発コース

キーワード：中学校社会科，資質・能力，総合的な学習の時間，特別の教科 道徳

### 1. 研究目的

新学習指導要領(『中学校学習指導要領解説 社会編』, 以下, 『新要領』)では, 見方・考え方を働かせて課題解決を行うことで, 生徒の資質・能力の育成を目指している。とりわけ「歴史的な見方・考え方」については, 『新要領』から新たに導入され, 定義(大友, 2018 など), 深めるための方法と働きを可視化する方法(草原, 2017 など), 授業作り(佐伯, 2019 など)等が模索されてきた。

このような研究を踏まえ, 筆者も所属校において, 「歴史的な見方・考え方」を深めながら, 資質・能力を育むための授業実践を行ってきた。その結果, 本質的な問いに結び付くための問いの設定, 学習カードへの単元を通して考えたことの記入, ルーブリックを用いた評価, 学習前の生徒の実態把握により, 生徒の学習の深まりや変容を確認しながら指導を行うことが, 「歴史的な見方・考え方」を働かせ, 資質・能力を育む上で有効であることが明らかになった(矢澤他, 2018)。しかしながら, その後, 実践を行う中で, 生徒が他の教科や領域での学びを活用して学習に取り組む姿を確認し, 他の教科や領域の学習経験が与える影響を考察する必要が出てきた。この点については, 雑誌『社会科教育』(2020)等でも, 社会科だけでなく, 他教科や領域との連携を図ることの重要性が指摘されている。

そこで筆者は, 他教科や領域の中でも, 「総合的な学習の時間」(以下, 「総合」)や「特別の教科 道徳」(以下, 「道徳」と, 社会科における歴史分野の連携の有効性を検討した。その理由は, 「総合」においては, 教育目的が異なるため峻別が必要であるが, 両者の学習内容を相互補完する可能性を従来から指摘されてきたこと(小西, 2000 など)があげられる。「道徳」においては, 戦後の道徳教育のあり方は, 戦後初期に成立した社会科との関わりの中で模索されてきた(貝塚, 2001 など)歴史的背景を踏まえた関係性の高さや, 実践レベルで社会科と「道徳」の連携の重要性が認識され, 特定の単元開発の研究が行われているからである(古川, 2019 など)。

以上を踏まえ, 本研究では, 他教科や領域との連携を通して, 「歴史的な見方・考え方」を深め, 中学校社会科における資質・能力を育む授業を構想するための方法と課題を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

本研究の方法は, 次の 3 つである。まず, 本実践で用いる「歴史的な見方・考え方」を定義する。次に, 社会科の授業における「歴史的な見方・考え方」を深めるための他教科・領域との連携を意識した授業を構想, 実践し, 生徒の学びを検証する。具体的には, 総合的な学習の時間と道徳との連携を意識した授業を構想した。その上で, 中学校社会科における資質・能力を高めるための方法と課題について明らかにする。

### 3. 研究成果

#### 3.1 「歴史的な見方・考え方」の定義

本研究では、『新要領』の内容を踏まえ、「歴史的な見方・考え方」を「歴史学習において考察したり、選択・判断したりする際の視点（見方）や方法（考え方）として用いられるもの」と捉える。その上で、その内容を『新要領』の歴史的分野の目標(2)(3)（文部科学省，2017）を踏まえて「見方」「考え方」の点から整理し、表1のようにまとめた。

表1 「歴史的な見方・考え方」の定義

歴史的な見方の基本	歴史的な考え方の基本
<ul style="list-style-type: none"> <li>・時期，年代などの時系列に関わる視点</li> <li>・展開，変化，継続など諸事象の推移に関わる視点</li> <li>・類似，差異，特色など諸事象の比較に関わる視点</li> <li>・背景，原因，結果，影響など事象相互のつながりに関わる視点</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史に関わる事象の意味や意義，伝統と文化の特色や，事象相互の関連を多面的・多角的に考察する（A）</li> <li>・歴史に見られる課題を把握して，学習したことを基に複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する（B）</li> </ul>

#### 3.2 「歴史的な見方・考え方」を深めるための授業構想と実践

##### (1) 社会科「第2次世界大戦と日本」と総合「ヒロシマからのメッセージ」（2019年5月3学年）

筆者の所属校では、2年生後半から3年生前半に「総合」で題材「ヒロシマからのメッセージ」を扱う。また同時期の社会科では、「第2次世界大戦と日本」を学習する。そこで、「総合」との連携を意識した社会科単元を構想して実践した。

本単元は、「総合」で学習した知識・技能との連携を踏まえて構想した。「総合」の題材「ヒロシマからのメッセージ」は、日本の歩んできた戦争と平和の歴史を知ること、これからの自分の生き方を考えることがねらいの一つである。ここでの学びを生かし、日米開戦までの世界の中における日本の立ち位置や終戦に至るまでの日本の動きを「歴史的な見方・考え方」を深めながら、日本が戦争へ突入していった背景を捉える。

本実践より、「総合」との連携を踏まえた結果、生徒の学習過程と学習後の様子に、資質・能力の育成が見られた。具体的には、日米開戦に至るまでの推移を政治的な視点で考察していたY生が、当時の日本が訴えてきた平和の価値に視点を置き、現代の平和の価値観と比較をしながら考察し、学習問題の結論を導きだした。日米開戦という概念的知識だけで終わることなく、「総合」の中で深く学習してきた残留孤児に関わる知識を重ね合わせながら、今もなお家族との再会を待ちわびる人々の思いや戦争によって生まれた諸課題を踏まえ、日米戦争について再考しようとするY生の姿がそれである。

こうした結果は、生徒が「歴史的な見方・考え方」を働かせ、歴史的事象を考察する際には、事前に体験等を通じた実感的な学びの中で形成された知識や技能があることを意味する。これにより、社会科で培われる知識や技能に加え、「総合」での学びから来る生徒自身の経験も視野に入れることで、更なる伸長が望めることが示唆された。

##### (2) 社会科「犬伏の別れ」と道徳「ある武士親子の決断」（2019年12月2学年）

筆者の所属校では、学校生活や各教科・領域の学習を考慮しながら、「道徳」の内容項目と各教科・領域の資質・能力を関連させた年間計画を作成して実践している。このことで、

「道徳」で扱いたい道徳的価値についてより深く考え、各教科・領域における「見方・考え方」を深め、資質・能力の育成につなげていくことができると考えている。

そこで、「道徳」の題材「ある武士親子の決断」では、内容項目 C-(14)を扱い、家族愛、家庭生活の充実を自覚し、自分自身の家族に対する敬愛の気持ちを深めることをねらいとして、自作教材を作成して実践を行った。社会科では、「道徳」で学んだ道徳的価値やこれまでの経験を生かし、戦国時代における真田家が家族を分けて関ヶ原の戦いに臨むことを決断した理由を「歴史的な見方・考え方」を深めながら追究していくことで、社会科の資質・能力の育成につながるのではと考え実践を行った。

本実践より、「道徳」で考えたことを持ち寄り、歴史的な事象を自分事として捉えることで「歴史的な見方・考え方」を深めながら、歴史的な事象を考察する生徒の姿が確認できた。同時に、「歴史」、「道徳」との関連を意識した学習問題の設定により、資質・能力の育成が見られた。具体的には、学習問題「なぜ父は、別れて戦うことを決断したのだろうか。」を設定し、追究していく過程にある。S 生は、戦国時代の大名として家や領地を守ることの価値に加え、真田親子が徳川、豊臣の家臣として権力を持つ過程から、事象同士のつながりを結ぶ因果関係に気づき、親子の立場の違いを比較することで、当時の武士社会の営みを中心とした考察を行った。加えて S 生は、自らが「道徳」で考えた父親の胸中と、昌幸が家族に対して抱いていた思いを重ねて振り返った。そこでは、昌幸の決断に対して、本当は家族で別れて戦うことが嫌だったのではないかと想像し、父は家族思いで、武士として立派な人物であるとまとめた。この背景には、「道徳」で家族の在り方について考えた上で、「歴史」で当時の武士が家を守ることの価値を学んだことが影響していると推察される。

こうした姿から、「道徳」と連携を意識して「歴史」の授業を行うことが、生徒の「歴史的な見方・考え方」を深め、社会科の資質・能力を育成する上で有効であると示唆された。

### (3) 社会科「第二次世界大戦と日本」と道徳「私の生きる道」(2020 年 7 月 3 学年)

(2) と異なる「道徳」の内容項目と関連させた授業実践を行った。

「道徳」の題材「私の生きる道」では、内容項目 D-(22)を扱い、自己の心の弱さや醜さと向き合い、よいよい生き方を見いだしていくことをねらいとして、自作教材を作成し、実践を行った。社会科では、「道徳」で学んだ道徳的価値やこれまでの経験を生かし、長野市出身の原田要氏という、生徒にとって身近な人物の生き方を通して、第 2 次世界大戦中や大戦後の政治や人々の営みの変化について、「歴史的な見方・考え方」を深めながら考察していくことで、社会科の資質・能力の育成につながるのではと考え、実践を行った。

本実践より、「道徳」で考えたことを持ち寄り、単元を通して「歴史的な見方・考え方」を深めながら考察する生徒の姿が確認できた。同時に、身近な人物を扱うことにより、「道徳」で扱った人物の心情に寄せて考えやすくなり、より深く当時の人々の思いに迫ることができることが明らかとなった。具体的には、学習を進めて行く中で K 生は、戦中、戦後の政治体制の変化と、戦中はゼロ戦パイロットとしての誇りをもっていた原田氏が、戦後に多くの人を殺めてしまったことに対する罪の意識と向き合いながら、平和の大切さについて次世代に語り継ごうとした思いの変化を結び付けて考察した。また K 生は、小単元のまとめの中で、「罪だと感じたら、自分ができる最善の行動で多くの人々の幸せを作るべき。」

と原田氏の生き方から考えたことを付け加えて記述した。この K 生の姿は、戦中、戦後の政治や人々の営みの変化を考察する際に、身近な事象を扱うことで、「道徳」で学んだ、自己の心の弱さや醜さと向き合い、乗り越えようとする主人公の心情を想起しやすく、「歴史的な見方・考え方」を深め、資質・能力を育成する上で有効であることが示唆された。

#### 4. 研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、「総合」や「道徳」との連携をし、社会科の資質・能力を育成する授業を構想するための方法として明らかになったことは以下の 4 点である。

- ①「総合」における体験などを通じた実感的な学びの中で形成された知識や技能が加わることで、社会科の学びがより豊かになっていく。
- ②歴史的事実とその背後にある人々の思いに迫るために、社会科の目標と「道徳」の内容項目との関連を意識した単元展開を構想していく。
- ③「歴史」「道徳」との関連を意識した学習問題を設定することで、社会的事象を追究する際の、「歴史的な見方・考え方」を深めることにつながる。
- ④「道徳」で考えた道徳的価値と重ねやすくするために、社会科で扱う社会的事象を、身近な人物といった、生徒にとって興味・関心の持ちやすい素材を扱うことが有効である。

一方で、各教科・領域との連携により、社会科本来のねらいに即した学習から、道徳的価値に寄りすぎた学習となってしまうことも危惧される。また、本研究では扱わなかった地理的分野や公民的分野における他教科や領域との連携についても、中学校社会科における資質・能力を育むための実践研究として行っていく必要がある。

以上を踏まえながら、今後も社会科の資質・能力を育むために他教科や領域との連携を図って授業づくりを行うこと、連携した他教科や領域にはどのような影響をもたらしていくのかといった視点を取り入れて、研究を進めていきたい。

#### 文献

- ・大友秀明 (2018) 「歴史の授業と教材－見方・考え方について－」『埼玉大学紀要 教育学部』67-1, 143-149 頁。
- ・貝塚茂樹 (2001) 『戦後教育改革と道徳教育問題』日本図書センター。
- ・草原和博他 (2017) 「歴史的な見方・考え方の働きはいかに可視化できるか」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』66, 41-50 頁。
- ・小西正雄 (2000) 「社会科と『総合的な学習の時間』との関係をめぐって」『社会認識教育学研究』15, 1-10 頁。
- ・佐伯綱義 (2019) 「歴史的な見方・考え方を働かせ、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指す授業づくり－「明治維新」の授業を通して」『社会と人間』13, 15-22 頁。
- ・古川雄嗣 (2019) 「小・中学校道徳科及び社会科、ならびに高等学校公民科の接続・連携に向けて－予備的考察としての新学習指導要領の分析－」『北海道教育大学紀要・教育科学編』70-1, 41-51 頁。
- ・文部科学省 (2017a) 『中学校学習指導要領解説 社会編』。
- ・文部科学省 (2017b) 『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』。
- ・『社会科教育』731, (2020)。
- ・矢澤拓真・武井正樹・小池克昌・篠崎正典 (2018) 「中学校社会科における『歴史的な見方・考え方』を高める授業の構想－単元「江戸時代のなぞにせまる」の開発と実践を通して－」『教育実践研究』17, 51-60 頁。